

NEWS

Tenri University Sankokan Museum

LETTER NO.14

ニュースレター NO.14

天理大学附属天理参考館

発行日：2013. 3. 18

発行：天理大学附属天理参考館

編集：広報普及

第68回企画展 古代東アジアの漆芸

【会期】4月3日(水)～6月3日(月)

【会場】3階企画展示室

漆は東アジア特有の樹脂で古代から使用されていました。我が国では縄文時代早期(約9,000年前)には利用され、土器の表面に塗ったり、編み物に塗っていました。また、中国でも最近、新石器時代(約7,000年前)にはかなり高度な技術で漆器が製作されたことがわかってきており、我が国のものより古いものが出土する可能性があります。

漆器の木地は木だけではなく、編み物(藍胎)や布(乾漆・夾紵)、皮(漆皮)などにも塗り重ねて使用されました。また、漆の色調は本来、茶色に近いものですが、朱やベンガラを混ぜて縄文時代では赤が主流でした。しかし、弥生時代から律令時代までは黒

が主流で、赤漆はなぜか殆ど使用されませんでした。

表面の紋様は漆で描いたものと漆が生乾きの時に針やナイフの先で漆を削りとり、紋様を描いた細かい毛彫りの技法を用いたものもあります。

今回の展示では中国の戦国時代から漢代にかけて製作された容器や武器を中心とし、漢代の出先機関であった楽浪郡出土の漆器、日本の古墳時代刀装具や時代が新しくなりますが東南アジアの漆器も展示します。

特に古代中国漆器の紋様の流麗さと、当時は大変貴重であった漆を大量に使用した夾紵棺の断片などをご覧いただければ幸いです。



中国戦国時代の耳杯

トーク・サンコーカン 「古代東アジアの漆器」

日時：4月27日(土) 午後1時30分～

講師：山内紀嗣(当館学芸員)

会場：研修室

ギャラリートーク

日時：5月27日(月) 午後1時30分～

会場：3階企画展示室

講演会 「漆の道を科学する」

日時：5月18日(土) 午後1時30分～

講師：岡田文男(京都造形芸術大学教授)

会場：研修室



中国戦国時代の鳥紋木胎矩形盒



儀礼用精霊仮面「ジパエ」
インドネシア、パプア州
アスマット地方

2009年、当館は埼玉県鶴ヶ島市より、同市が所蔵していた今泉隆平コレクション「オセアニア民族造形美術品」のうち、465点の資料を受贈致しました。受贈した資料の多くはインドネシア、パプア州(西部ニューギニア)とパプアニューギニア、湾岸州からのものです。本展は、鶴ヶ島市からの寄贈を記念した企画展として、パプア州の先住民の精霊像に焦点を当て、その造形の豊かさや精霊崇拜のあり方について紹介します。

パプア州には、主に内陸部で暮らすパプア人と海岸地帯やニューギニア島周辺の小島に入植したオーストロネシア系の海洋民族が古くからの先住民として暮らしています。

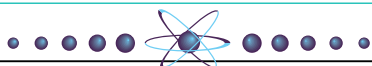
彼らは自然とともに生き、そこに精霊の存在を感じ取り、人びとの暮らしのいたるところに精霊が姿をあらわします。パプア州の精霊像はそのほとんどが裸体で表現されています。

人びとは精霊像や仮面を作り、崇拜対象として崇めるだけでなく、楫や舟具、楽器などの暮らしの道具にも精霊が宿るとの願いを込め、随所に精霊や神々の姿を象り、文様として表したもののや、器物の一隅にその姿を取り付けたものが見られます。精霊に加護を求めよ

うとする祈り、あるいは精霊とともに暮らそうとする人びとの願いが、それらの道具から伺い知ることができます。こうした彫刻作品はしばしば芸術的な面から「原始美術」「未開芸術」と呼ばれています。パプア州ではアスマット地方の木彫芸術が世界的にも高い評価を受け、アメリカや西欧諸国の美術館では「アスマット」のコーナーが設けられているとのこと。これらの造形はこうした自然とともに生きるニューギニアの人々の「精霊」「神がみ」への信仰がそのまま形として表されているといえます。しかし、民具に彫り込まれている神がみの像について、あまり信仰的な価値づけがなされていないことも事実です。本展ではこうしたことを踏まえながらパプア州の人々が作り出す造形美に加え、これらのものの背景にある彼らの精神文化の豊かさにも注目していきたいと思います。(早坂)



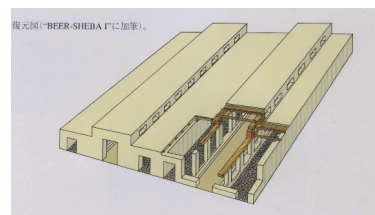
靈魂の船「プラモン」インドネシア、パプア州アスマット地方北西部



イスラエルにおける発掘調査 (十一)

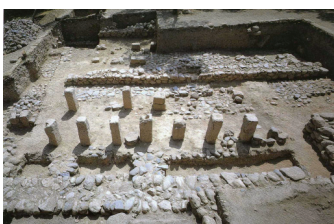
今回も続けてエン・ゲヴ遺跡の調査成果について紹介します。先号では、この遺跡は強固な城壁に囲まれていたことを説明しました。この城壁の内側にある建物について説明します。

調査した位置が遺跡の北東隅であり遺跡で最も高い所であったことから、重要な施設があると想像されていました。その結果、列柱式建物と呼んでいる特殊な構造の建物がみつかりました。それは平面が長方形の建物で、長軸方向に3分割されています。その長軸の2本の境目の部分に屋根を支える石列が並んでいるのです。建物は東西19.8m、南北8.1mあります。こうした建物が2部屋ありました。石列の石の上には多分、柱が載せられており、石は屋根を高くする構造になっていたのでしょう(復原図参照)。列柱式建物は外側の城壁と正確に平行しており、城壁が築かれるときに同時に建造されたことがわかります。



列柱式建物の復原図

さらにこの2部屋の列柱式建物の下部にもう一層古い時代の列柱式建物があることがわかりました。こちらは上層のものよりやや大規模で、長辺20.4m、短辺17.8mの建物が上層同様に2部屋、壁を共有して建てられていたこともわかりました。しかし、上層の建物を保存するために下層のものは一部分しか発掘していません。



上層の列柱式建物

列柱式建物はイスラエル国内でも全ての都市にあるわけではなく、比較的大規模で各地の拠点的な都市にしかありません。また、上下二層にわたって建造されていた遺跡は他にありません。それだけエン・ゲヴ遺跡が重要な町であったことがわかります。また列柱式建物の用途については諸説ありますが、城門に比較的近い位置にある例が多いことから倉庫の可能性がります。まだまだ問題がある遺跡です。(山内)

松田顧問の考古余話④ 古墳の被葬者

3世紀から7世紀にかけて、我が国では各地に巨大な墳丘や石室をもつ権力者の墓が築かれました。古墳時代という名称としても使われるように、日本歴史の中でも特異な時代でした。しかし一貫して古墳には埋葬者を明示した墓誌は置かれることはありません。極めてまれに被葬者を決定づける資料が出土する古墳もありますが、新たな古墳が発掘されると、しばしば被葬者論争が闘わされます。これもある意味ロマンがあって良いのかも知れません。

さて、発掘調査当時、大きな話題となった斑鳩の藤ノ木古墳の2人の被葬者も諸説ありましたが、最近では蘇我馬子に誅殺された穴穂部皇子と宅部皇子とする説が有力でしょうか。副葬品の内容や男性2体の埋葬に加えて、斑鳩という土地、円墳という墳形、不慮の死を思わせる状況などもその根拠とされています。しかし最近、装身具の内容から1体は女性の可能性があるとか、古墳出土の須恵器は2人が亡くなった587年より遡る、などの疑問が提示されています。藤ノ木古墳のような未盗掘で豊富な副葬品が出土した古墳は、単に誰が埋葬されたかということに留まらず、前後の古墳の築造年代基準にも大きく影響を与えることになり、被葬者の想定はより重大な意味を持つことになります。

資料紹介



とんざんせいせいおうしゅうりょうもんざら
鍍金銀製帝王狩獵文皿



ビスポール



ビスポール



ササン朝ペルシアの帝王が馬に乗りながら豹に弓を引く狩獵図を、線彫りで描写した銀皿で、部分的に鍍金が施されています。帝王は5世紀に活躍したバフラムV世と推定され、同王の妙技を表現したものです。しかし、長剣描写がないなど、その図像表現がササン朝時代のものではないことから、ササン朝が滅んでから作られたものと考えられています。

ササン朝ペルシアは7世紀中頃にアラブ勢力により滅ぼされます。人々は東へ東へと逃げ、ササン朝の宮廷文化は東方に伝播します。皮肉なことに唐代の中国では滅んだ王朝文化であるペルシア文化がブームとなります。騎馬で振り向きざまに矢を射っている表現は大変好まれたようで、中国に多大な影響を与えました。この射法はパルティアン・ショット（安息式射法）と称されるもので、日本でも法隆寺獅子狩獵文錦で良く知られています。（巽）



鍍金銀製帝王狩獵文皿
イラン 7～8世紀
直径 24.4cm

インドネシア、パプア州南西部のアスマット地方では、精霊崇拜にもとづいた行事を数多くみることができます。亡くなった死者を弔う盛大な祭礼「ビス儀礼」もその一つです。ビス儀礼では、死者の靈魂をあらわす木柱像“ビスポール”が儀礼小屋の内外に立てられます。高いものでは7mを超えるものもあっていわれています。

ビスポールは、幾体かの祖霊や精霊の像が上下に重なり合って彫刻された柱像です。また、ビスポールは板根（幹近くの根が板状になって地上に現れたもの）がある熱帯広葉樹の樹木で作られ、根の方を上にして、上下が逆さまとなって立てられています。天空に根を張り、幹が地上に向かって伸びるさまは、天空から祖霊や精霊が地上に降りてくる様子を表しているかのようです。一本の木柱に様々な霊性が示されているビスポールは、ありし日の死者の肖像を象るだけでなく、現実に生じる生と死のイメージから、再生や豊穡との関わりが指摘することができるのではないかと考えられています。（早坂）



“ビスポール”インドネシア、パプア州アスマット地方中央部 高 554cm

周辺の見所

ごちどう
五智堂

柳本町の長岳寺から西へ約800メートル行った所に、単層の屋根に本瓦葺きの小さな建物があります。長岳寺の飛び地に建つこの建物は、どこから見ても正面に見えるため真面堂とも呼ばれ、国の重要文化財に指定されています。

建物の中央には丸くて太い心柱があり、建物の全重量を支えています。その心柱の上部には四仏の梵字額があり、大日如来以外の如来が表されています。大日如来は密教から誕生した仏で、この大日如来に備わる五つの智慧を五智と呼んでいます。それをこのお堂で表現しており、中央の心柱を大日如来に見立て、東西南北の面に梵字でもってほかの四仏（四つの如来）を表して五智如来としています。このように、中央の心柱に五智如来を表すということから「五智堂」という名前が伝わっています。

江戸時代には床も貼ってあったそうで、伊勢参りや長谷寺詣での休憩所になっていました。それはまた、参拝客の通行安全祈願のために造られた供養塔だったのかもしれませんが。（太田）



五智堂 天理市柳本町真面堂

公開講演会トーク・サンコーカン

- ◇いずれも午後1時30分開講（申込不要）
- ◇会場：研修室
- ◇受講料：無料（ただし入館料が必要）

第222回『古代東アジアの漆器』

4月27日(土) 講師/山内 紀嗣 学芸員

漆器はアジア特有のものです。その起原については中国か日本かまだ決着はついていません。春の企画展に合わせ、展示物のうち古代中国の漆器を中心にその美しさと機能について解説します。

第223回『西部ニューギニア南東地域の「生命の木」』

6月22日(土) 講師/吉田 裕彦 学芸員

インドネシア、パプア州（ニューギニア島）南東部のアスマット地方やミミカ地方には、ビスポールやビトロという「生命の木」があります。祖霊の姿や霊的なモチーフが一本の柱に彫刻されていて、5mを超えるものもあります。両地域の人びとの世界観をビスポールやビトロを通して考えてみたいと思います。

第224回『1万年ほど前の天理』

—布留遺跡縄文時代早期の調査報告—

9月28日(土) 講師/太田 三喜 学芸員

奈良県天理市に所在する布留遺跡は古墳時代の遺跡として著名ですが、縄文時代から人々の営みがあったことが発掘調査で確認されています。1990年代には今から約1万年前の縄文時代の遺跡が調査され、多くの遺構や遺物が発見されました。今回は整理を終えたこの遺跡の実態に迫りたいと思います。

2013(平成25)年度

ワークショップ 参加者募集!

クラシックギター講座

「ギターで世界の音楽を奏でよう！」

- 募集人員/10名
- 参加費/1,000円(全9回分、入館料を含みます)
※別途、楽譜代・消耗品代(弦等)実費3,000円が必要です
- 会場/天理参考館 研修室
- 実施日/4月24日(水)～9月まで
午後1時30分～3時30分 毎回水曜日を予定
- 備考/練習用のギターがありますので、楽器がなくても参加できます。
- 担当/乾学芸員、中尾学芸員

お知らせ



5月18日は国際博物館の日

5月18日(土)にご来館された方に、記念品を配布する予定です。なお、記念品が無くなり次第終了とさせていただきます。

トーク・サンコーカン今後の日程

- | | | | |
|---|---------------------|---------|-----|
| 第225回 『卑弥呼のまつり —銅鐸から鏡へ—』 | 11月16日(土) | 講師/高野政昭 | 学芸員 |
| 第226回 『馬・牛・ウマのおはなし』 | 2014(平成26)年1月25日(土) | 講師/幡鎌真理 | 学芸員 |
| 第227回 『時代の寵児 ^{ちようじ} ハイネリッヒ・シュリーマン —黎明期の考古学—』 | 2月22日(土) | 講師/巽 善信 | 学芸員 |
| 第228回 『天災を伝えた幕末明治の刷り物』 | 3月15日(土) | 講師/中谷哲二 | 学芸員 |

世界の生活文化と考古美術の博物館

天理大学 附属

天理参考館

TENRI UNIVERSITY SANKOKAN MUSEUM

住所：〒632-8540 奈良県天理市守目堂町 250

TEL：0743-63-8414 FAX：0743-63-7721

URL：http://www.sankokan.jp/

開館時間：午前9時30分～午後4時30分（入館は午後4時まで）

入館料：大人 400円/団体(20名以上)300円

小・中学生 200円（学校単位の団体は無料・事前申し込みが必要）

携帯電話のサイトから
情報をご覧頂けます

